

秋季シンポジウムのお知らせ

下記の要領で第3回秋のシンポジウムを開催します。今回のシンポジウムでは、東アジア、中東、ヨーロッパの各地域を対象に、今日行われている地域世界論をとりあげ、その再検討を試みます。議論を通じて各地域世界論を相対化すると同時に、研究の新たな方向を模索したいと思います。お誘い合わせのうえご参加下さるようお願いいたします。

2007年 メトロポリタン史学会 第3回秋季シンポジウム 「地域世界論の新地平」

日時：2007年11月17日(土曜日) 10:00～17:30

会場：首都大学東京(東京都立大学) 91年館多目的ホール
(京王相模原線南大沢駅下車・徒歩5分)

懇親会：南大沢駅前・春庭花 18:00～20:00

報告者

千葉正史 氏(明治学院大学非常勤講師)

「天朝『大清国』から国民国家『大清帝国』へ

- 清末中国における政治体制再編と『帝国』概念の受容 - 」

金子修一 氏(國學院大学)

「古代東アジア世界論とその課題」

北島万次 氏(元共立女子大学)

「秀吉の朝鮮侵略における鼻切りと虚構の供養」

藤田 進 氏(東京外国語大学)

「故郷喪失者が問う地域

- パレスチナ難民の現場から考える - 」

栗田禎子 氏(千葉大学)

「『中東』論の現在

- 『大中東構想』と『イスラーム世界』論のはざままで - 」

平田雅博 氏(青山学院大学)

「地域・国民国家・帝国(ウェールズ・イギリス・イギリス帝国)

- 1847年ウェールズ教育状態報告書を素材に - 」

【歴史随想】

鶴越と多田行綱

川合 康（東京都立大学、日本中世史）

神戸の中心部にある新開地駅から、20分ほど神戸電鉄に揺られると藍那（あいな）駅に着く。神戸市北区山田町の藍那地区は、周辺で大規模な造成・開発が進むなか、昔ながらの里山の風景を保ち、中世の石卒塔婆や宝篋印塔がその景観に溶け込むように残されている。平安時代末期、この地域は平清盛領の摂津国八部郡山田荘内であった。

この藍那地区を南北に一本の道が貫いている。道の傍らには、「和泉式部の墓」と伝承される南北朝時代の美しい宝篋印塔が建っており、この道が中世以来の古道であったことを伝えている。道を北に進めば、山田荘内の西下村で東西に走る湯山街道山田道と接続する。湯山街道とは、大阪平野の昆陽野（こやの）と姫路平野の印南野（いなみの）を六甲山地の北側を通して結ぶルートで、古くから山陽道の裏街道として利用されていた。平安時代末期には、昆陽野は平清盛と協調関係にあった多田行綱の勢力圏にあり、一方の印南野には平清盛領の大功田が広がっており、湯山街道は平氏の管理下にあったと推測される。

さて藍那の道を今度は南に進むと、山中の間道を下って福原（神戸市兵庫区）に隣接する夢野に出、さらに大輪田泊に到達する。福原とは、いうまでもなく平清盛が山荘を営んで常住し、のちには遷都まで強行しようとした平氏の本拠地の一つである。湯山街道から南に分岐して、藍那を通り福原まで下るこの道のことを、地元では「鶴越」と呼んでいる。周知の通り鶴越は、『平家物語』では源義経の軍勢が一の谷の平氏陣営に向けて「坂落し」を敢行した「獣道」として描かれているが、現実には意外にも、福原と山田荘・湯山街道を結ぶ平氏権力膝下の重要ルートとして存在したのである。

都落ち後、一旦は九州にまで逃れた平氏軍が、再び勢力を回復して福原・大輪田泊に集結した寿永3年（1184）2月、京を制圧していた鎌倉軍は二隊に分かれて平氏陣営を攻撃した。平氏は福原の東の生田森（神戸市中央区）と西の一の谷（神戸市須磨区）に大規模な「城郭」＝バリケードを築いて守りを固め、京から山陽道を西に進んだ源範頼の大手軍とは生田森で、京から丹波路を経て播磨印南野に迂回し、山陽道を東に進んだ源義経の搦手軍とは一の谷で激しい戦闘を交えた。

東の生田森と西の一の谷の間は直線距離で10キロ以上あり、また北側の山中から福原に抜ける鶴越と一の谷の間も8キロほど離れている。『平家物語』は、生田森・一の谷・鶴越のすべての戦場を一の谷に圧縮し、「一の谷合戦」という独自の合戦空間を創造したことが指摘されているが、一の谷を攻める義経軍が山中の鶴越を進んだという記述も、まさにそうした架空の合戦空間に基づいているのである。実際には、義経軍が一の谷を攻撃したことが同時代史料から確認される以上、義経は鶴越を通過していない。

九条兼実の日記『玉葉』には、合戦の翌日の情報として、源範頼の「浜地」（生田森）、義経の「一の谷」の軍功に加えて、「多田行綱山方より寄せ、最前に山の手を落さると云々」とある。この記事を見れば、多田行綱の軍勢が鶴越を進んで「山の手」の平氏の防衛ラインを突破し、最初に福原に侵入したことは疑いないであろう。先に見たように、鶴越は西摂・東播地域の平氏勢力圏の重要ルートであり、平氏都落ちまで長年にわたり同地域で平氏と協調関係にあった多田行綱にとって、熟知した道であったに違いない。鶴越の歴史的な性格を考えれば、まさに多田行綱こそ「山の手」を攻略するにふさわしい人物といえよう。行綱は摂津国惣追捕使（守護）として義経の搦手軍にしたがっており、搦手軍の別働隊として鶴越を進軍したと思われる。

『平家物語』が創り上げた架空の合戦空間に影響されて、義経の鶴越の「坂落し」の現場として一の谷

の背後にある須磨の鉄拐山や鉢伏山を想定し、ロープウエーで登る鉢伏山の展望台から神戸の街を見下ろした写真を掲げる歴史書が現在も多い。「坂落し」のイメージに合わない鶴越の道は、歴史書でも紹介されることはなかったのである。

しかし、冒頭で述べたような藍那の里の鶴越の景観こそ、地域社会に残された貴重な文化遺産であり、歴史をとらえる際の基礎に置くべきものである。最近、神戸大学でともに学んだ友人たちと、そのような思いから、歴史資料ネットワーク編『地域社会からみた「源平合戦」』（岩田書院）を刊行した。立ち読みでも構わないので、鶴越の写真を他の歴史書と是非見比べていただきたいと思う。

メトロポリタン史学会第三回総会・大会報告

4月21日（土）に、首都大学東京（東京都立大学）91年館多目的ホールにおいて、メトロポリタン史学会の第三回総会・大会が開催されました。参加者は41名でした。

午前10時、小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり、2006年度活動報告、決算報告、監査報告、2007年度活動方針案・予算案が順次提案され、それぞれ採択されました（4～7頁参照）。討論では、最後に委員（任期2年）の選出を行ない、終了しました。

午後は、「歴史学再考 - 社会史の現状をめぐって - 」をテーマにシンポジウムが開かれました。内容は以下の通りです。なお報告は会誌『メトロポリタン史学』第三号（2007年12月刊）に特集論文として掲載の予定です。

- | | |
|-------------------|--|
| 保立道久氏（東京大学） | 「社会史研究から歴史知識学へ」 |
| 大澤正昭氏（上智大学） | 「唐宋時代社会史研究の現状と課題」 |
| 粟屋利江氏（東京外国語大学） | 「“サバルタン・スタディーズ”と社会史の可能性：
植民地期インド史研究の動向から」 |
| 喜安 朗氏（日本女子大学名誉教授） | 「戦後歴史学と社会史：
網野善彦氏の業績を中心に」 |

【大会参加記】

2007年度メトロポリタン史学会参加記

小嶋 茂稔（東京学芸大学）

「歴史学再考 - 社会史の現状をめぐって - 」というシンポジウムのタイトル、錚々たる報告者の方々と報告論題に惹かれて、初めてメトロポリタン史学会に参加させていただいた。私自身は、中国の古代国家を対象としてその地方支配を具体化する統治機構のあり方を中心に研究を進めている者であるが、「社会史」という方法については、自ら具体的に展開することが出来ないまでも、かねて関心を抱いていたことも参加した理由の一つであった。

日本史学に留まらず他の地域の歴史研究にも大きな影響を与えた日本中世社会史研究の学説史を手際よく整理し、その特徴と限界を提示した上で、その「社会史」を引き継ぐ方法として「歴史知識学」を提唱した保立道久氏。中国史研究の世界における「社会史」研究の困難さの存在を指摘した上で、唐宋变革期における社会史研究の方法を検討し、『清明集』などの史料に依拠しつつ宋代の村落社会のあり方や再生産構造に潜む諸矛盾を新たな視角から明らかにした大澤正昭氏。近代インド史における「サバルタン・スタディーズ」のあり方とそれに関連する諸問題について門外漢にも分かりやすく紹介してくれた粟屋利江氏。昨年逝去された二宮宏之氏の研究業績を回顧しつつ、戦後歴史学と社会史の関わりについて論じた喜安朗氏。以上の四氏の報告はいずれも興味深いものであったが、以下、中国史を専門とする私の関心から、大澤氏の報告を聞いて感じたことを簡単に述べたいと思う。

氏の報告の中心的論点は、唐宋時代の中国社会における在地有力者の家族経営のあり方を、ご自身の手になる「アメーバ型複合経営体」という概念を用いて説明されたところにあったと思われるが、むしろ私が惹かれたのは、中国史研究(特に前近代史研究)では、アナル派の影響がほとんどみられないこと(これは、管見の限り日本・中国双方の学界において同様であると思われる)、その一方、わが国では戦後の一時期に唐宋变革期の把握の仕方を中心に中国史の総体的な理解を巡って多くの論争が行われたこと、しかしながらここ 20 年ほどは 社会経済史離れ 現象が進んでいること、等々の中国史研究をめぐる研究史への言及であった。新たな視角から「社会史」研究を深化させる試みが重要であることはもちろん言を俟たないが、日本史の研究でも一定の成果を見せる「社会史」研究が、なぜ中国(前近代)史の研究とは十分な親和性をほとんど持たずに今日に至ってしまったのか、この点は史学史的見地からの検討に値する課題ではないかと私は改めて考えさせられた。その検討のためにも、いわゆる「先行研究の整理」の域を超えた形で、氏の指摘する戦後中国史研究の「特殊事情」の背景とその当時の研究者に共有されていたであろう問題意識に思いを致しつつ、総括的に先行学説を整理・批判していくという作業を、我々後進の一人一人が進めていく必要があるという思いを強くした次第である。

メトロポリタン史学会第三回総会議案書 2007.4.21

【メトロポリタン史学会 2006年度活動報告 2006.4 ~ 2007.3】

1. 会誌『メトロポリタン史学』第2号を2006年12月に刊行し、史学科のある大学を中心に、約80機関に寄贈した。
2. 研究会を1回実施した。
 - ・2006年7月22日
 - 報告者：高瀬克範氏、白川耕一氏 参加者7名
3. 書評会を1回実施した。
 - ・2007年2月3日
 - 河原温著『ブリュージュ』(中公新書、中央公論新社、2006年) 参加者9名

4. 第2回秋季シンポジウム「いま社会主義を考える - 歴史からの眼差し - 」を、2006年11月25日（土）に、首都大学東京（東京都立大学）91年館多目的ホールにおいて実施した。
参加者33名
5. 第1回歴史探訪「安重根と柳宗悦」（講師：趙景達氏）を2007年10月8日（日）に実施した。
参加者24名
6. 第1回秋季シンポジウムの報告集『歴史における人の移動とネットワーク』を、メトロポリタン史学叢書として桜井書店から出版する準備を行った。
7. 第3回総会・大会（2007年4月）の準備を行った。
8. 会報3号（2006.8.1）、4号（2007.3.20）を発行した。
9. 会員数は現状維持にとどまり、拡大目標（180名）を達成できなかった。

【メトロポリタン史学会 2007年度活動方針 2007.4 ~ 2008.3】

1. 会誌『メトロポリタン史学』第3号を2007年12月に刊行する。
2. 研究会・書評会等を実施する。
3. 第3回秋季シンポジウムを2007年11月17日（土）に行う。
4. 第1回秋季シンポジウム報告集『歴史における人の移動とネットワーク』、第2回秋季シンポジウム報告集『いま社会主義を考える - 歴史からの眼差し - 』を、それぞれ『メトロポリタン史学叢書』1、2として桜井書店から出版する。
5. 第2回歴史探訪を10月7日（日）に実施する。
6. 第4回総会・大会（2008年4月19日）の準備を行う。
7. 180名を目標に会員拡大に努め、会財政の確立を図る。

【メトロポリタン史学会 2007年度委員名簿 任期：2007.4 ~ 2009.3】

会 長：佐々木隆爾
 副 会 長：峰岸純夫、増谷英樹、青木哲夫、小谷汪之
 事 務 局：木村誠（事務局長）、赤羽目匡由
 編 集：河原温（責任者）、奥村哲、佐々木真、澤田秀実、新村恭、月脚達彦、福田千鶴、山田朗
 企画・研究：中野隆生（責任者）、小野昭、角田三佳、川合康、趙景達、橋谷弘、林田伸一
 監 事：立石博高、木村茂光

【メトロポリタン史学会 2007年度予算 2007.4.1 ~ 2008.3.31】

〔収入〕 1,294,029円

前年度繰越金		135,145円
会費		837,000円
一般会員	5,000円 × 140人	700,000円
学生・院生	3,000円 × 18人	54,000円
未収分	5,000円 × 16人 3,000円 × 1人	83,000円
* 予定会員数：180名（一般160名，学生・院生20名）		
寄付(談話会)		321,884円
合計		1,294,029円

〔支出〕 1,294,029円

会誌制作費		500,000円
郵便料金		136,800円
会誌郵送	180円 × 260件	46,800円
大会案内・会報等発送		80,000円
はがき・切手		10,000円
事務用品代		20,000円
賃金・旅費		50,000円
予備費		587,229円
合計		1,294,029円



【メトロポリタン史学会 2006年度決算報告 2006.4～2007.3】

〔収入〕

		2006年度予算	2006年度決算
前年度繰越金		111,355 円	111,355 円
会費		837,000 円	576,000 円
	2005年度		
		(現金) - 円	10,000 円
		(銀行) - 円	0 円
		(郵便振替) - 円	28,000 円
	2006年度		
		(現金) - 円	148,000 円
		(銀行) - 円	0 円
		(郵便振替) - 円	380,000 円
	2007年度		
		(現金) - 円	10,000 円
		(銀行) - 円	0 円
		(郵便振替) - 円	0 円
雑収入		-	41,283 円
	会誌売上	-	41,260 円
	銀行口座利息	-	23 円
計		948,355 円	728,638 円

〔支出〕

		2006年度予算	2006年度決算
会誌制作費		500,000 円	395,730 円
郵便料金		125,000 円	100,800 円
	会誌発送	45,000 円	39,600 円
	大会案内・会報等発送	40,000 円	54,200 円
	はがき	-	3,000 円
	切手	40,000 円	4,000 円
	その他	-	0 円
事務用品代		30,000 円	4,353 円
アルバイト賃金		50,000 円	50,000 円
雑費		-	42,610 円
	振込手数料	-	420 円
	録音用メモリー・乾電池	-	8,350 円
	お茶・紙コップ	-	2,450 円
	大会懇親会赤字補填	-	31,390 円
予備費		243,355 円	-
次年度繰越金		-	135,145 円
	現金	-	16,852 円
	銀行	-	15,133 円
	郵便振替	-	103,160 円
計		948,355 円	728,638 円

会員数 150名 (一般138名 学生・院生12名)

会費納入率 06年度: 117/150=78.0% 05年度: 141/149=94.6%

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回 12 月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年 8 月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
論文(図表を含み、24,000 字以内; 英文の場合は、8,000 語以内)
研究ノート・史料紹介(同 12,000 字以内; 英文の場合は 4,000 語以内)
学界動向(8,000 字以内; 英文の場合は 2,700 語以内)
時評・提言(4,000 字以内)
- (5) 論文、研究ノート(縦書き、横書きいずれも可)には、欧文で要旨(300 語以内)を添付する(原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内)。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿(表、図表を含む)3 部、フロッピーディスク及び別記送り状*(1 部)を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り 50 部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒 192-0397 八王子市南大沢 1 - 1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース(歴史・考古学分野) 河原 研究室 気付

『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119 (河原研究室) Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp (河原温研究室内)

SNC47077@nifty.com (河原温)

* 送り状は学会ホームページ(<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>)からダウンロードするか、または本会報添付次頁をコピーしてご利用下さい。

『メトロポリタン史学』投稿原稿用送り状

種別を で囲む	論文 研究ノート・史料紹介 学界動向 時評・提言		
著者名	日本語		
	英語		
表題	日本語		
	英語		
本文(で囲む)	日本語	英語	
要旨(で囲む)	英語	日本語	
ワープロソフト名 又はワープロ専用機種名 フロッピーディスクの種類			
連絡先			
〒			
住所			
氏名		Tel:	
		Fax:	
		E-mail:	
No.	受付: 年 月 日	No.	受理: 年 月 日

【事務局からのお願い】

毎回同じ内容で恐縮ですが、会費の納入をお願いします。年末には『メトロポリタン史学』第3号の刊行と、その支払いが予定されてますが、2007年度の納入率は16%にとどまっております、危機的状況です。納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい。一般 5,000 円、学生・院生 3,000 円です。よろしくお願い致します。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒 192-0397

東京都八王子市南大沢 1 - 1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

: 0426-77-2110 (木村誠研究室)

E-mail : mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

ホームページ : <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替 : 00100-0-537287